



反逆の勇者と道具袋 1

α L P H H L I G H T

大沢雅紀

Masaki Osawa



アルファライト文庫 

ケルビム

魔王アンブロジアの息子。
210歳。実力で十六魔将まで上り詰めた逸材。次の王位を虎視眈々と狙っている。

アーシャ

フリージア王国獅子騎士団副長。27歳。カストール伯爵家の次男で、長男ドンコイとは確執がある。第三女王メルトと恋仲。

ノーム

大地と恵みの四大魔公。
780歳。誠実かつ慎重な性格で魔国を支える。戦場では自らを盾にして弱者を守ることも。

ウンディーネ

最年少の四大魔公。120歳。
水と癒しの魔法を操る一族の長で、お嬢様育ちの美しい女性。

シンイチ

本編の主人公。17歳。
道具袋を唯一扱える「勇者」。剣や魔法の才能は全くない。

シルフ

四大魔公シルフィールドの分身。1万歳以上。いたずら好きな性格で、いつもシンイチ達をからかう。

メアリー

フリージア王国第四王女。
14歳。妾の子として兄弟から蔑まれている。思いやりがあって優しい性格。

アンリ

犬族の女の子。10歳。
魔力の弱い種族のため虐げられ、スラムでひっそりと暮らしている。

「世の中には、自分が悪くなくても理不尽な目に遭う人間がいる。

平凡な高校生である菅井真一は、常にそう思っていた。

「今日はこれくらいにしてやるよ」

「今日みたいにお仕置きされなくなかったら、さっさと妹を連れてこいよ？」

校舎裏で不良達に散々殴られて、ボロ雑巾のようにされている。

「なあ、いい加減こいつらの願いを叶えてやれよ。てめえなんか虫けら同然なんだから、俺らの言う事を聞いていけばいいんだよ」

不良達の中でひときわ背が高く、容姿も優れたリーダー格の男が言う。

同級生の井山光司。学校一の金持ちでスポーツ万能。そして裏では暴走族のリーダーをしている。もつとも学校で目立っている男であった。

「ただでさえお前はムカつくんだよ。単なる幼馴染の分際で愛と付き合っていたんだってな。しかもアイドルの妹がいるんだって？ どう考えても分不相応だろうがよ」

光司の言葉に仲間達も笑う。

「いいか、お前の妹を連れて来い。そうしない限り、ずっと毎日殴り続けるからな。学校

辞めても無駄だぞ。お前の家はわかっているんだからな」

不良達は真一の財布をあさり、札を抜いてから真一に投げつけ、笑いながら去って行った。しばらく校舎裏に座り込んで休んだ後、のろろと帰路につく真一。

その途中で、一組のカップルが仲良く帰宅しているのに出くわした。

「光司、これからどこに行く？」

「そうだな、久しぶりに街に行くか……って、まだいたのかよ。目障りだぜ」

カップルの男、光司が真一を見て顔をしかめる。

「あんた、ちゃんとした格好してなさいよ。いつもだらしなくて……晴美ちゃんが恥をかんでしょ！」

真一の汚れた制服を睨みつけ、光司と一緒だった秋紀愛が言う。

彼女は真一の家の隣に住む幼馴染であり、以前はよく遊んでいた。

一年前には恋人だったが、一方的に振られ、今彼女は光司と付き合っている。

「もつと優しくしてやれよ。以前はこいつと付き合ってたんだろう？」

裏では真一を馬鹿にしているくせに、愛の前ではこの態度だ。

「止めて。そんなの子供の頃の延長みたいなものよ。大きくなって世界が広がれば、こんな平凡な男なんてつまらないだけ」

これ見よがしに光司の腕にすがりつく愛。

「そうだよな。てか、いつまで見てんだよ。さっさと消えろよ！」

光司が威嚇すると真一は慌てて背を向ける。その姿を見て、愛はニヤニヤと笑っていた。

家族に有名人がいるのは素直に誇らしいが、そのせいで不幸になる事もある。

現実では妬まれ疎まれて、幼馴染の女の子からも馬鹿にされる日々。

真一は重い足取りで自宅に帰っていった。

「お兄ちゃん。おかえりなさい……どうしたの？　なんか顔が腫れてるみたいだけど」

先に帰っていた晴美が心配そうに尋ねてくる。

長い黒髪にすらりとした身体、そして綺麗な容姿。

さすがに大人気アイドルグループの一員だけあって、文句なしの美少女だった。

「い、いや。ちょっと転んだだけだよ。それより、今日はどうしたんだ？　こんなに早く帰ってくるなんて珍しいな」

「今日はオフだよ。ちょっと待ってね。手当てしてあげる」

救急箱を持ってきて、甲斐甲斐しく治療する晴美。

小さい頃から仲のよい兄妹で、晴美がアイドルになってからもそれは変わらない。だからこそ真一は晴美に心配をかけたくなって、苛めの事は黙っていた。

「ありがとう。お母さんは？」

「なんか事務所で打ち合わせがあるって。だから私だけ先に帰ってきたんだよ。今日は私
がご飯作ってあげる」

晴美は輝くような笑顔を向けてくる。

「そっか。俺は疲れたから、少し寝てくるよ」

「了解。出来たら起こしてあげるね」

階段を上がって自分の部屋のベッドに倒れこむ真一。

そのまますぐに眠りに落ちていった。



????

あれ……? ここはどこだ?

目が覚めたら、いつのまにか知らない部屋にいた。

おかしい。いつものように自分の部屋で寝ていたのに。

寝ぼけた頭で現状を確認する。

俺は菅井真一、十七歳。

父と母と妹の四人暮らしで、ごくごく平凡な高校二年生。

帰宅部で、趣味は歴史の本を読んだり、歴史に関するいろいろなキーワードをインター
ネットですぐ調べたりする事。

家族の仲は良かったって良好だが、学校では苛められている。

十五歳の妹晴美はアイドルグループの一員として大ブレイク中。ここだけが普通と違う
ところだが、俺自身にはなんの能力もない。

父親は信用金庫の職員。母親は妹のマネージャーみたいな事をしている。両親はあまり
自分に干渉してこないで、比較的自由に過ごしていたのだが……。

もう一度再確認する。

確かにさっきは自分の部屋で寝たはずだった。

しかし、ここはどこだ?

俺の部屋はこんなに広くないし、豪華でもない。今座っているベッドなんか天蓋てんがいつき
キングサイズだし。

考え込んでみると、ドアが開いて白いドレスを着た美少女と、メイド服の少女が入って
きた。

「お目覚めになりましたか? 初めてお目にかかります。勇者様」

彼女達は満面の笑みで話しかけてきた。

「勇者様?」

「はい。あなた様は、この世界を救う運命の勇者様。私はあなた様に忠誠を捧げます。申し遅れました。私はフリージア皇国第三王女、メルトと申します。あなた様のようなすばらしい方を召喚できて誇りに思います」

笑顔を浮かべてすらすらと話す彼女はメルトと言うらしい。

「フリージア皇国？ 第三王女？ そんな国聞いた事もないけど？」

「はい。それは当然です。我々を救っていただけ、勇者としての才能がある方を異世界から召喚させていただいたのですから。失礼ですが、この袋を開けていただけませんか？」

メルトは薄汚れた道具袋を差し出す。ちょうど持ち歩けるくらいの大きさで、中には何も入っていないように潰れている。

「何も入っていないみたいだけど……うわ!!」

袋を開けたとたん、空中に魔法陣が浮かび上がった。

「ああ……やはり勇者様。その袋は主と認めた者にしかその中身を取り出させないのです。その魔法陣に手を入れて、勇者にふさわしい装備を取り出すよう念じてみてください」

「だから、勇者じゃないって。やれって言うならやってみますけど」

言われるままに念じてみると、金色のフルプレートが現れ一瞬でシンイチの身体に装着された。



「ああ……『皇金の鎧』。まさに勇者様の装備品です」
大げさに喜ぶメルト。

「なんだか夢を見ているようだな。いや、これはきつと夢だ。寝よう」
現実逃避をしてベッドに潜り込もうとしたが、鎧が邪魔で苦しい。

「ねえ、この鎧なんとかならないの？ 重くて邪魔なんだけど」

「あつ、はい。すぐに外させていただきます。ミル、お願い」

側に控えていた、ミルと呼ばれたメイド少女の手を借りて鎧を脱ぐ。

「あの……勇者様、『アルを全額』と念じて、袋から出てくるか試していただけませんか？」

「アルって何？」

「この世界、オールフェイル共通の金貨でございます」

「まあいいけど。それじゃ、アル全額出ろ！」

再び魔法陣に手をつ込んで、触れたものを取り出してみる。

次の瞬間、金貨が大量に溢れてきて部屋中が金色の光に包まれた。

「……なんだこれ？」

「すばらしいです。これで我が国も救われます。次はですね……」

次々と取り出すように要求され、言われるがままに従うシンイチ。

輝く剣、きらびやかな鎧、美しい宝石、輝くドレス、金銀財宝……。

途中からシンイチも面白くなり、次に何が出てくるか期待するようになっていた。

「これで全部ですね。ありがとうございます」

何十回も道具袋から物を取り出して、やっと作業は終了した。

取り出しては驚くの繰り返しで、シンイチはかなり疲れてしまった。

「お疲れ様でした。それでは明日、私の父である国王陛下に謁見していただきます。今日はごゆっくりお休みください」

道具袋から取り出した品々はメルトの指図で片付けられ、代わりに豪華な料理が運ばれてくる。美しい侍女が給仕してくれるようだ。

シンイチはしきりに恐縮していたが、優しく接され、ごちそうを堪能できた。彼女達の話によると、この世界の暦や基本的な生活習慣は地球と大きな差異がないらしい。

食事の後は広い風呂に入り、与えられた部屋でリラクセスした。

（やれやれ……異世界召喚か。物語ではよくあるけど、実際に自分が巻き込まれるなんて思わなかったよ。でもいいか。メルトってお姫様やメイドさん達もみんな綺麗だし。 فقط勇者か……どう考えても俺には無理そうなんだけだな）

そんな事を考えながら、豪華なベッドで眠りに就くシンイチなのだった。



フリージア城——謁見室

「メルト、勇者の様子はどうだ」

玉座から威厳のある声が発せられた。

「はい、父上。今日のところは歓待しましたから、今は気持ちよさそうに寝ておりますわ」
メルトがこの国の王であるヘラート四世に返答する。その顔は嘲るような冷笑。

「ふふふ。魔王を倒して用済みになった勇者を余の先祖が始末したはいいものの、あの道具袋の封印が勇者にしか解けないとは不運だった。おかげで勇者が世界中から集めた伝説の武器防具や金銀財宝も、これまで取り出せぬままになっていた。これでは魔王に対抗できません。どうしたものかと思っていたが……」

「術を習得して再び勇者を召喚するのは骨が折れましたわ。他の王族は頼りになりませんし。カリグラ兄様も姉様達も、王族の身分に胡坐をかいて遊びまわるだけの役立たず」

王も薄笑いを浮かべる。

「ふふ。しかし、前回の勇者とちがっておとなしいものだな。もう少し覇気がないと、役に立たんかもしれん」

「まったくですわ。前回の勇者は出現すると同時に、召喚した魔術師を皆殺しにしたんですよね」

くすくすと笑い声を上げるメルト。

「笑いごとではないぞ。そのせいで、勇者召喚魔法をもう一度開発するのに数百年もかかったのだからな」

「ええ。苦労いたしましたわ。ですが、これで勇者が集めた装備品や金銀財宝は私達のもの」
「ああ。もはや用済みだが……いや、まだ勇者として役に立つかもしれん。しばらく鍛えて魔王討伐の旅に向かわせろ。世界中を旅させて勇者の名前で各国の財宝を提供させてから、魔国に送り出せばよい。再び我らのために働いてもらおうではないか。一応念のために、豪華にしつらえた『奴隷の首輪』をあやつに付けてな」

「わかりました」

二人で顔を見合わせて笑う。

一方、シンイチは何も知らずに眠っていた。

翌朝、さっそくメルトが呼びに来て、シンイチは国王と面会する事になった。

「何か緊張するな」

元の世界では王様どころか、市長にすら会った事はない。

「大丈夫ですよ。シンイチ様は我が国の救世主ですから」
 メルトが優しく手を引いて案内した。

謁見室は広間になっていて、壇上^{だんじょう}に玉座がある。脇には数多くの紳士^{しんし}・淑女^{しよじゆ}がいた。この国の貴族達らしい。

玉座には堂々とした態度の中年男性が座っている。

メルトはその男性の前までシンイチを連れて行く^とと膝を突いた。シンイチもそれに倣^{なま}う。「そなたが勇者シンイチか。余は皇国フリージアの王ヘラート四世じゃ。この度はよく我が娘メルトの召喚^{まわん}に応え、我が国に参った。勇者として存分に尽くすがいい」

人に命令^{めいれい}しなれた口調^{くちよう}で告げる。

「スガイ・シンイチと申します。まず事情を教えてください。勇者とは一体何をすればいいのでしょうか」

緊張して震えそうになる声を必死^{めいじ}に抑えて問いかける。

「我が国の東方は、魔国^{まこく}という魔族が支配する国に接しておる。国境では、魔族により我が国の民が毎日何十人も不当に害^{がい}されておる。その魔王は、放つて置けばこの世界を破壊しかねない存在であり、それに唯一対抗できるのは異世界にいる勇者の資質を持った者のみじゃ。そのために貴君^{きくん}を召喚した。ちなみに前回の勇者は見事期待に応え、魔王を滅^{めつ}し世の中を救ったのじゃ」

「前にもそういった事があったのですか？」

「そうじゃ。新たな勇者である貴君にも、きつと出来る」

煽^{あお}るように王が言うと、周りの紳士・淑女から拍手^{はつしゅ}が巻き起こった。

「シンイチ様ならきつと大丈夫ですわ。メルトは信じております」

頬^{ほお}を染めて言うメルト。

「はは、メルトも勇者を信じているようじゃな。期待しておるぞ。それでは勇者の証^{あかし}として、『勇者の首輪』^{勇者の首輪}を授^まける」

王は玉座から立ち上がり、跪^{ひざま}いているシンイチに金や銀で装飾された首輪を着ける。すると自動で輪^{あし}が縮まり、ジャストサイズになった。

「こ、これは？」

「勇者としての能力を引き出し、弱点である首を守る聖具^{せいぐ}じゃ。役目を果たしたら自動で外れる」

「ま、待ってください。まだ俺は引き受けると決めたわけじゃ……」

「シンイチ様。ぜひとも私達をお助けください。私達はあなた様にすぎるしかないので。その首輪はあなた様を守るもの。決して邪魔にはならないはずす」

「だ、だけど、いきなり嵌^はめるなんて……」

「勇者殿！」

王から強い視線を向けられる。周りの貴族も同様の視線をシンイチに浴びせていた。

「は……はい。わかりました」

シンイチは観念したように受け入れた。

「では、勇者シンイチの誕生と魔王討伐の旅の出発を祝って、乾杯！」

大広間に移動して、パーティが始まった。

王族や貴族達はこのやかにシンイチに話しかけてくる。

「勇者様のこれからの旅が順調でありますように」

「勇者様、期待しています。ぜひ魔王を倒して私達をお救いください」

身勝手な期待をかけられ、シンイチは段々腹が立ってきた。

（なんなんだよ……勝手に魔王を倒せなんて人に言いつけて、自分達はその間パーティでお楽しみか？）

そんなシンイチにメルトが近づき、声をかけてきた。

「勇者様、皆が期待しております。笑って安心させてやってください」

「そうは言っても……」

「皆があなたをお慕いしていますわ。もちろん私も」

不満顔のシンイチの手を取って、にっこりと笑うメルト。

「え？？ あ、いや……」

「さ、ダンスを踊りましょう。私がリードいたしますわ」

顔を真っ赤にするシンイチ。絶世の美少女に手を取られて照れないわけがない。

（単純な男。まあ途中で野垂れ死ぬでしょう。万一魔王を倒して帰ってきてても、以前の勇者と同じように暗殺すればいい。当然世界中の財宝も集めてくるでしょうから、それを取り上げてからね。それまではこうやってあやしておきましょう）

腹の中でシンイチを馬鹿にしながら、メルトはシンイチとダンスを踊っていた。

やがてダンスが終わると、シンイチはメルトから魔王討伐隊のメンバーになる者を紹介された。

「勇者殿、よろしく。私はアーシャ・カストール。皇軍獅子騎士団の副長を務めている」

金髪碧眼の美形の青年が挨拶する。二十代前半くらいで、がっしりとした引き締まった体つきをしている。

「よ、よろしくお願います」

シンイチは手を出して握手を求めた。どう見ても向こうの方が勇者っぽい。

「アーシャ殿はカストール伯爵家の次男で、皇国で最も強い騎士として名声が高いのです」
メルトが説明する。その目は憧れの人を見る時のように潤んでいた。

「いや、私など勇者殿の足元にも及びません。ですが皇国のため、メルト様のため、必ず

魔王を打ち倒してまいります」

アーシャはまっすぐメルトを見つめて言った。

「期待しております……アーシャ様」

そんな二人に無視され、空気になっていているシンイチ。

「こほん……それでボクの紹介もしてくれるかな？　メルト姉さま」

振り返ると、中学生くらいの可愛い顔立ちをした少女が立っていた。

「あら、失礼しました。この子は私の腹違いの妹で、メアリーと申します。こう見えて、国一番の魔法使いになる素質があるそうですわ」

「よろしくね。勇者さん」

「よろしくお願ひします……でも、王女が魔王討伐の旅に同行するのですか？　それもこんな子供が……」

シンイチがいぶかる。

「子供って言うな！　あんたも子供じゃん」

「まあまあ。実は、メアリーは公的には王族として認められていないのです。彼女は王の落胤らくいんのうえ、母親が身分の低い平民出身なので……」

「別にいいけどね」

メアリーはふてくされたようにそっぽを向く。

「じゃ、これからよろしく」

そう言い捨てると、さっさと離れていった。

「……仲が悪いの？」

おそろおそろシンイチが聞く。

「別に仲が悪いわけではありませんよ。妹とはいえ、普段はあまり接する事ありません。平民の母を持つているくせに、魔力が強いおかげでなんとか王宮に残れているような子ですからね」

冷たく笑うメルト。

シンイチはその顔を見て、先ほどのダンスで高まった想おもいが少しずつ冷ひやめていくのを感じた。

「メルト姫さま、私も紹介をお願いします」

少ししてから、自分と同年くらいの伶俐れいりそうな少年から声をかけられた。彼は値踏みするようにシンイチを見つめている。

「これはノーマン神官。シンイチ様、彼が最後のメンバーで、回復魔法の使い手です」

「よろしく」

「……よろしくお願ひします」

握手するシンイチだったが、相手から好意的な気持ちは感じ取れなかった。

「勇者様はそれぞれのメンバーから戦闘の手ほどきを受けたあと、魔王討伐の旅に出発していただきます」

一方的に宣言するメルト。

シンイチは訳もわからないまま、自分がとんでもない危険に巻き込まれていく気がしていた。

「す……少し外の空気を吸ってきます」

逃げるようにその場を離れるシンイチ。メルト達三人は冷やかな目で見送った。

「ふふ。とりあえず首輪を付けられましたね。これで安心です」

メルトが安心したように呟く。

『勇者の首輪』といっても、奴隷の犯行防止に使われる『奴隷の首輪』に装飾を施しただけのものだ。勇者が反抗すれば首を締め上げ、息の根を止める。

この手のアイテムは仕様として目的を設定されており、それを果たせば自動で外れるようになっていている。言い換えれば、魔王を倒すまでは決して外せないのだった。

「……しかし、いささか警戒しすぎではないでしょうか。私が見たところ、筋肉の付き方も動きも常人以下。少々鍛えたぐらいではモノになりそうにもありません。まして反逆などする度胸もなさそうだ」

アーシヤは呆れたように首を振る。

「まあ、付けておいて損はないでしょう。哀れな勇者に乾杯！」

ノーマンが言うと、三人は笑いながら杯を掲げた。



王宮のベランダ

「はあ。なんでこんな事になったのかな？ てか、魔王討伐なんて軍の仕事だろ？ なんて勇者とその仲間に任せるんだよ」

一人で愚痴をこぼすシンイチ。

「まあ、それに関してはボクも同意見だけどね。どうしようもない理由があるんだよ」
後ろから突然、可愛い声で話しかけられた。

慌てて振り向くと、さっき紹介されたメアリーが立っている。

「あ、メアリーさん……いえ、ただの独り言ですから」
シンイチは焦って言い訳する。

「気にしなくていいよ。それにメアリーでいい。ボクもシンイチって呼ぶから。敬語も不要」
「わかった。それじゃメアリー、あらためてよろしく」

「うん。これ飲む？」

ワインが入ったグラスを渡してくる彼女に、シンイチは問いかける。

「ねえ、さっきの理由って？　なんで軍隊で戦争しないの？」

「魔法の存在が大きいよね。広域魔法を敵に使われたら、魔法耐性の低い兵士はすぐ全滅つまり、強い魔力を持つ個人の力に戦争は依存するの。雑魚が何万人でかかってもたった一人を倒せない事は珍しくない」

それを聞いてシンイチは考え込む。

（量より質って事だよな。今のところ、魔王だけで軍を打ち破れるくらいの力の差があるわけか）

「……でも、俺は戦いの経験もないシロウトだよ？」

「そんなの知らないよ。姉さまの勇者召喚魔法は、勇者としての資質を持つ者を選択して召喚する魔法だけど、何百年も前の失われた魔法を断片的に調べてやっと作り上げたんだもん。何か問題があってもおかしくないよ。勇者の道具袋が反応したみただから、全くの失敗じゃないとは思っただけだねー。でもキミに、伝説の勇者みたいないなすごい能力があるとは限らない。現にこう話していても、魔法量が一般人程度しか感じられないし」

「マジで……？　そんな無責任な」

「まあ、がんばりなよ。ボクも正直魔王討伐は気が進まないんだけどね。お母さんが死んで、何か国に貢献しないと王宮にいられなくなっちゃうから参加するんだよ。自分の事で

手いっぱい」

それだけ言うと、メアリーは会場に戻っていった。

「マジかよ……」

後には呆然とするシンイチだけが残された。

「それでは、今日から戦闘について修業していただきます」

パーティの翌日、メルトとアーシャが部屋に入って来て言った。

「もちろん兵士用の宿舎に移してもらどうぞ。鍛えねばならんからな。すぐに支度しろ」

「ハイ……」

シンイチは逆らえるはずもなく、着替えを道具袋に入れて豪華な部屋を出た。

最初に基礎体力を調べると言われて、兵士用のグラウンドを走らされる。

「遅い！！　なんだそのザマは。もっと真面目に走れ」

「ハア……ハア。無理ですよ」

シンイチはごく一般的な高校生で、この世界の一般人と比べると体力が大きく劣る。当然、アーシャの目からは懦弱に見える。

「話にならない……それでも勇者か！！　情けない」

十周ほど全力で走ったところで、アーシャは汗もかいてない。他の兵士達も平然として

いる。

しかしシンイチは疲労でへたりこんでいた。

「おいおい……あんなので勇者？ 大丈夫かよ」

「いいよこの貴族のお坊ちゃんでももう少しマシだぜ」

「だらしねーな。なんか俺でも余裕で勝てるんじゃないね？」

最初にシンイチを勇者として紹介され、期待が大きかった分、兵士達の間で嘲りが起こった。

（しようがないじゃん。俺は文明人で一般人だぜ。野蛮人のプロの兵士に体力勝負で勝てるか!!）

心の中で叫ぶシンイチだが、口には出せなかった。

「まったく……ほら立て!! 次は剣術だ」

アーシヤが木剣を投げて寄こす。

シンイチはようやく息を整えて、木剣をつかんで立ち上がった。

「相手は……そうだな。新兵という事で、ホライゾン。相手をしてみる」

「は……はい」

呼ばれたのは背の低い少年兵士で、シンイチよりも華奢に見える。

「よかつたな勇者様。さすがにアイツには勝てるだろ。まだ十二歳の新兵だからな」

「ホライゾン。さんざん鍛えてやったんだ。負けたら承知しないからな」

周りにヤジが飛ぶ。

「開始!!」

木剣での勝負が始まった。

（授業で剣道をした事があるけど、防具を着けずにやるのなんて初めてだな。でも相手は子供だし……なんとかなるかも）

「面!!」

シンイチは木剣を上段から振り下ろす。

しかし次の瞬間、いきなり足に激痛が走り、もんどり打って倒れた。

ホライゾンと呼ばれた少年兵士が、シンイチの脛に剣を振るっていたのである。

痛みあまり地面をころげまわるシンイチを見て、周囲は爆笑していた。

「あいつ馬鹿か？ 足を狙ってくるのは常識だろ？ わざわざ足を止めて剣を振りかざすなんて何考えてんだ？」

「勇者様は俺達の手もつかないようなすごい技を見せてくれる予定だったのさ!!」

見物人の兵士達は言いたい放題だ。

「勝者、ホライゾン。本当にこれが勇者なのか？ こんなド素人をつれて魔王討伐とは……もういい!! 下がっている」

アーシャの命令により、治療室に運ばれるシンイチ。

「まったく……伝え聞く前回の勇者とは雲泥の差があるな。我々も対応を考えねばなるまい」

アーシャはこれからの事を思ってたため息を吐いた。

「いてて……やっぱり無理だよ。俺、今まで戦いなんかした事ないもの」

治療室のベッドではやくシンイチ。

「おかしいですね。勇者様は剣の才能もあるはずですし、召喚の儀式で勇者としての能力も引き出されるはずなのですが。私達と会話が出来るので、儀式の効果は確かにあつたはずですしね」

治療室で看病しているメルトが応じる。

「なあ、やっぱり俺には無理だと思う。元の世界に帰してくれないか？」

「それが、魔王を倒すまで帰還魔法が作動しないんです。私達も勇者様の希望は叶えてさしあげたいんですが……でも、魔法の才能はきつとありますよ。気落ちなさらないでくださいね」

優しくシンイチの手を握る。

「……メアリーが、俺の魔法量は一般人並みだって言ってたけど？」

シンイチはジト目でメルトを見て尋ねた。

「いえ、あの、勇者でも最初は一般人と変わらないんです。戦いの経験^つを積んで、魔物が死ぬ時に落とす魔法玉^{まほうぎよく}を吸収していけば、自然に魔法量は増えていきます」

「レベルアップか。そうだといいんだけど……」

「さあ、気を取り直して、魔法の修業をしましょう。我々の師匠である宮廷魔術師フォンケル様が、午後から授業をしてくれる予定です」

「わかったよ……」

どうにか気を取り直して、前向きになるシンイチだった。

ところが昼食後にフォンケルの授業が始まると、そこでも問題が発生した。

「字が読めない……じゃと？」

白いひげを生やした、いかにも魔術師といった風貌^{かざま}の老人が驚く。

「はい……読めません」

シンイチが下を向いて言う。

分厚い魔術書を開いても、書いてある字がまったく読めなかった。

「そんな……勇者召喚術には、言葉や文字の知識を与えるといった機能もあつたのですが、言葉は通じてても文字の知識が習得されてないなんて」

メルトが呆れた声を出す。

「ふむ。我々が作り出した勇者召喚術は、遠い過去に失われた魔法技術の模倣^{もほう}じゃからの。完璧に再現するのは無理だったのじゃな」

残念そうに首を振る宮廷魔術師フォンケル。

「しかし、どうするか。魔法とは概念^{がいねん}じゃから、文字が読めんと話にならんぞ」

「少しづつ勉強していけば……俺、頑張り^{がんば}ますから」

慌てて答えるシンイチだが、二人の表情は暗いままだった。

「しかし、細かな概念まで理解するのにどれだけかかるか。このままでは魔法の習得に何年もかかりそうじゃ」

「……わかりました。勇者様の役割については、皆と相談しなければなりませんね。それでは失礼いたしますわ」

そう告げたメルトがさっさと出て行くと、後にはポカンとした顔のシンイチが残された。

「す……すみません。なんか一瞬で文字を覚えられるような魔法はないんですか？　なんかこのままではマズい気がします」

シンイチはフォンケルに取りすがった。

「ふむ。ない事もないがな。これがその魔道書じゃ」

奥の本棚から薄い本を取り出す。

「あ、ありがとうございます。さっそく使ってみますね」

「これ、待ちなさい。この本を使って文字解析魔法を習得しようとすれば、魔力量一万二〇〇〇を消費するのじゃぞ。今のお前さんは魔力量一五じゃ。魔力量を補うために魔法玉を使うとしても、一体どれだけ集めればいい事やら。スライムだと一万匹以上倒さないといかん」

「そんなに？」

「だからその本は誰にも使われんのじゃ。文字を覚えるだけなら、時間をかければなんとかなるからな」

「それじゃ、どうすれば……」

「こればかりはワシものう。まあ、その本はあげるから持つておきなさい」

「はい……」

シンイチは本を道具袋にしまうと、そのままとぼとぼと部屋に戻った。



フリージア城——会議室

「……というわけで、勇者には戦闘の才能がなく、魔法を習得する事も出来ないというわかり

ました」

メルトがシンイチの能力について説明する。

出席者は他に、国王・宰相・勇者パーテイの一同だ。

「ふむ……結局できる事は、道具袋への収納と取り出しのみか。なんとも情けない」

宰相モワノーが首を振る。肥満体型の中年男だが眼光は鋭い。

「まあ我が国の民でもないから野垂れ死んでも構わんがな。仮初めに過ぎんが、どうせ魔国とは平和条約を結んでおる。猛者は何人もいるし、前回の勇者の装備や魔法具も手に入った。今、無理に魔王を倒さなくてもよい」

国王の言葉に一同は頷く。

「私の見たところ、戦士としては役に立ちませんね。せいぜい荷物運びといったところでしようか？」

「しかし、文字すら読めないとは。なんとも中途半端な勇者様ですなあ」

アーシヤとノーマンが嘲笑う。

「では、勇者シンイチ殿は役立たずという事で、始末いたしますか？」

メルトが冷たく提案する。

「みんな、ちよつとひどくないかな？ 勇者を喚んだのはボク達なんだし、能力がないから始末するなんて……」

メアリーがシンイチに同情して言う。

「ふむ。このまま始末するというのもつたいないな。魔王の尊威にさらされている国や、前回の魔王討伐時に結ばれた『勇者協力条約』に加盟している国に対しては、勇者の看板が役に立とう。これから魔王討伐の名目で、各国秘蔵の装備や財宝を提供するよう呼びかける予定だったからな」

「なるほど。勇者の名前を出せば、他国から好きなだけ財貨を引き出せますし、冒険者ギルドも逆らえませんからね。我が国が世界の支配者となるには、よいチャンスです」

モワノーが欲深そうな顔をして言うのと、メアリーを除いた全員が同意した。

「しかし、その後の対処はどうするか。まさか本気で魔王を討伐するわけにもいかんし、そもそも無意味だ。魔王を倒しても次の魔王が生まれるだけ。無用に我が国への敵意を強めるだけだ」

国王が難しい顔をする。

「一つ提案があるのですが、魔国に使者を出してみれば？」

ノーマンがふと思いついたように顔を上げた。

「使者を出すのはかまわんが、どうするのだ？」

「それはですね……」

ノーマンが内容を説明すると、徐々に皆の表情が明るくなってきた。

「なるほど。それならば、魔王に対して恩も売れるな」

国王が感心したように言う。

「ふふ、異世界の小僧には気の毒な事だが、実に名案だ。これなら平和を手に入れられる」
アーシャも面白いと同意する。

「ふふ。これくらい我が国に役に立てば、勇者殿も本望でしょうとも」

口を手をあてて残酷に微笑むメルト。

一同が満足するなか、ただ一人メアリーは反対した。

「みんな、いくらなんでもひどすぎるよ。ボク、シンイチに伝えてくる」

席を立とうとするメアリーだったが、周りに止められる。

「お黙りなさい。卑しくも王の血を引く娘ならば、国の事を第一に考えなさい」

メルトがピシヤリと言うが、メアリーは納得できない。

「でも……」

「メアリーや。お前の優しい気持ちは嬉しいが、あの小僧を犠牲にすれば、世界中の人間が助かるのじゃ。我々は一人を犠牲にして、残りの九十九人を助ける決断を下さないとけない。それこそが王族というものじゃ。この件が終わればお前も第四王女として正式に認められる。死んだお前の母もそれを望んでいたじゃろう？」

国王が猫なで声で諭す。

「しかし……」

「これが一番、我が国で勇者を役立たせるやり方なのじゃよ。あのような無能な男、他に使うようがあるまい」

「……」

メアリーは言い返せずに沈黙する。

「ではこれで方針は決定じゃ。わかっていると思うが、勇者にこの事を気づかれてはならんぞ」

メアリーを除く全員が頷いた。

「……勇者がこの体たらくでは、各国を回って旅をするなどおぼつかないのでは？」
宰相モワノーが言う。

「確かに。もしもそれぞれの国を荒らしている魔族を倒して欲しいなどと頼まれては、真っ先に死んでしまいそうだ。そうなれば各国が不信感を抱きかねん」

国王の言葉に全員が考え込む。

もともと魔国と接している国は、大陸全土でフリージア皇国だけだ。

しかし魔族は空を飛んで移動できるので、平和条約を結んでいるフリージア皇国を正面から攻めるのを避け、周辺の弱国を直接襲い国土を占領し、魔族コロニーを築いているのが現状だった。

補給の問題で魔族の कोरोना はなかなか拡大しないが、各国にとっては国土が侵^{おか}されている状況なので頭^がが痛い問題だった。

「その辺を踏^ふまえて魔国と交渉すべきでしょうな。魔国に対しては妥協^{たきょう}を、周辺国に対しては支配を」

「人間が一致団結して戦おうとすると、まず戦場になるのは我が国。そんな迷惑^{ごうび}を被^かる必要はないでしょう」

モワノーとノーマンはあくまで自国の利益のみを追求しようとしていた。

「では、周辺国には勇者を召喚した事実を触れ回り、魔王を討伐すると宣言して各国所有の国宝級の装備や軍資金の提供を要求します。そして魔国には、現在の魔族 कोरोना を各国に自治区として承認させる代わりに、これ以上の領土拡大を自粛^{じしゆく}するように交渉しましょう。もちろん勇者と道具袋を交渉の材料にして」

メルトが具体的な方針を持ち出した。

「決まりだな。では各国に使者を出せ」

国王の裁決^{さいけつ}により方針は決定され、各国に使者が向かった。

その頃、シンイチは自室でうめき苦しんでいた。

訓練の名を借りた兵士達のしごき、苛^じめで、身体中が傷ついている。

侍女達もほとんどシンイチを無視しており、身の回りの事は全部自分でしなければならぬ。

食事^{ごはん}も最下級兵士用の残飯^{ざんぱん}で、一人でこそそと食堂^{すいどう}の隅^{すみ}で食べているありさま。

あまりの待遇にメルトに抗議したが、相手にされなかった。

「侍女達にはあなたの身の回りの世話をするように申しつけておりますわ。彼女達に言っただけですわ」

「でも……誰も相手にしてくれないんだよ」

「そのような事はありません。皆身元のしつかりした家の子女であり、ちゃんと教育をしております。それとも、フリージア城内の者が王族の命令を聞かないとおつしやらないのですか?」

「……」

冷たく言い放つメルト。シンイチは言い返せない。

「……なら、せめて小遣^{こづか}いくらいくれたつていいじゃないか。いきなり召喚されて、ただでこき使われるなんて」

実際シンイチの持ち物といえは、服と中身^{なかみ}が空^{から}になった道具袋しかない。一文^{いちもん}無しである。

「まあ、勇者様ともあろうお方がお金を寄せせだなんて。ほほほ……」

卑屈^{ひくつ}な者を見る目をシンイチに向ける。

「別に大金を寄せさせて言っていない！ 勇者だろうが人間だろうが、お金は必要だろうが！」

「……最低限のお金は勇者様にお渡しするように侍女に命じております。そのような些事は私に言われても困りますわ。それでは失礼します」

メルトはシンイチをまともに相手にせず、さっさとどこかに行ってしまった。

シンイチが無能だと判明したあとは、ずっとこんな感じだった。

「お金ですって？ ふふ、勇者としての仕事もこなせないのに、一人前によく言われますわね。侍女にもきちんと伝えておきましょう」

「メルトから俺に最低限のお金を渡すように命令されてるはずぞぞ！」

メイドが集まる控え室に突撃して言い放つシンイチ。

「あら？ 誰かメルト王女様から命令されているかしら？」

「さあ？ 貴女は？」

「知らない」

「私も知らない」

シンイチを嘲笑うかのように全員で唱和する。

「あはは。残念ですが、誰も命令を受けていないみたいですね」

「勇者さまは勘違いなされているのですよ。ふふっ」

「なんならアーシャ様に頼んでみられたら？ アーシャ様は伯爵家次男だし、騎士団副長だからお金持ちだし。あなた一人くらの小遣い、土下座して頼んだら恵んでくれるでしょうね」

「それはいいかも。勇者パーティーって言っても、結局はアーシャ様がいないと何も出来そうにないしね」

声を上げて笑う侍女達。

シンイチはいたたまれなくなって逃げ出した。

ふてくされて部屋でベッドに転がっていると、ノックの音がする。

「はい。あれ、メアリー？ どうしたの？」

部屋の前にはメアリーが立っていた。

「……ちょっと入っていい？」

「いいよ。どうしたのかな？」

邪気のない笑顔で迎えるシンイチ。今ではメアリー以外にはまともに相手にされないの
で、来てもらえて嬉しかったのだ。

その顔を見て、メアリーは罪悪感でいっぱいになった。

「別に。暇が出来たから、文字でも教えてあげようと思っただけだよ」

怒ったように答えるメアリー。
 「本当に？ 助かるよ。魔力が一般人と変わらないからってこの本をもらったんだけど、使えなくて。やっぱり地道に覚えなさいといけなかなと思つてたところ。ねえメアリー、これどうしたら使えるかな？」

そう言いながら、『文字解析』の魔道書を道具袋から取り出す。

「……よかつたら、ボクが使つてあげようか？」

「本当に？ 助かるよ」

「気にしなくてもいいよ。キミを喚んだのはボク達の都合なんだからね」

持つている杖を振ると、魔道書から光が溢れてシンイチを照らした。

「痛い!!」

「後もう少しだから我慢して」

数分間激しい痛みが続いた後、魔法が終了した。

「はい。じゃこれ読んでみて」

「どれどれ。昔々勇者が……読める!!」

「その本には勇者の事が書かれているよ。参考になるんじゃない？」

「メアリーありがとう。これでこつちの世界の歴史書も読めるよ!」

シンイチが礼を言うと、メアリーが赤くなる。

「べ、別にキミのためにしたんじゃないからね。勇者が文字も読めないなんて世間に知れたら、召喚したボク達の恥になるからしたんだよ!」

そう言い残すとドアを閉めて出て行ってしまう。

「メアリーって結構いいところあるなあ。可愛いし」

メアリーにほのかに好意を抱くシンイチだった。



魔国——魔王城

「フリージア皇国の使者殿か。よく参られた」

魔王アンブロジアが玉座から声をかける。

魔族はそれほど人と変わりない姿で、耳が長く、背に黒い翼が生えているのが特徴である。ただし、魔力は人間よりはるかに高い。

「魔王陛下におかれましてはご機嫌うるわしく。我が国との誠実な友好関係に、いつも王は感謝しております」

魔国とフリージア皇国は陰で平和条約を結んでおり、それなりに貿易もしていた。

「ふむ。しかし、最近その友好に傷をつける噂があつてな。おぞましき勇者を貴国が召喚